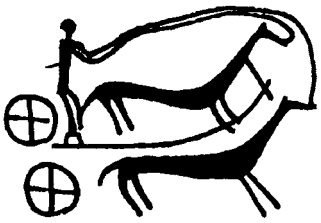
No. 73 *November* 2007

センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education
北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 73



「あまのじゃく」を育てる (4 ページ)
全学教育の科目責任者からひとこと (5 ページ)
単位の実質化―第 11 回北大教育ワークショップ― (9 ページ)

（詳しい目次は裏表紙にあります）

巻頭言 FOREWORD

北海道大学教育倫理綱領～改訂案
―「学問の自由」と「北大の教育精神」を明瞭に ―

獣医学研究科教授　藤田 正一

北海道大学教育倫理綱領案が教務委員会により提案されました。8 年ほど前，大学法人化の是非をめぐる論議が激しかった頃，私は「大学憲章」を制定し，大学のあるべき姿を明確にし，法人化の是非をめぐる論議に，大学がよって立つところを持つべきであるとインターネットで主張しました。今，多くの大学が，大学憲章を持っています。○○大学教育憲章として，その大学の教育における使命と理念，教員の責務を明確に宣言したものもあります。北大においては，憲章という言葉は定着しませんでしたが，北海道大学の「基本理念と長期目標」に教育の目指すところが明示されています。その中の，「自由・自主独立の精神の涵養と自律的個の確立を図る」という表現は私がどこかの記述で使ったことのある私独自の表現で，面映いが，取り入れられたことを光栄に思っています。そして今回，教育倫理綱領案が提示されました。「教育目標」に加えて，「倫理綱領」を明示することで，北大教員の決意

を宣言するものであると考え，歓迎します。

その前文には北大の「基本理念と長期目標」を引用して，その教育目標を達成するために，自らを律する規範を定めるとしています。そこに，重要な表現があります。「学問の自由を基盤とした…大学を実現すべく」です。この基盤が崩されないことを望みます。「学問の自由」とは，（1）研究目標，研究対象の設定と遂行の自由，（2）研究によって得られた成果と知識を研究者の良心に従って，曲げることなく公表する自由と義務，および（3）それらを曲げることなく教育により伝達する自由と義務が含まれます。さらに，「大学の自治」も広義の「学問の自由」に含まれるとされています。

この「学問の自由」は西欧ではガリレオの地動説に対する宗教裁判に見るように学問教育に政治や宗教の介入が繰り返された苦い歴史から確立されてきた概念です。政権による「学問の自由」の侵害の危険は世界的認識で，1950年ユネスコにより召集され，ニースで行われた世界の大学の国際会議では，大学と不可分の理念のひとつとして，「多様な意見に対する寛容と，政治的干渉からの自由」（The tolerance of divergent opinion and freedom from political interference）をあげています。また，新渡戸稲造も著作「札幌農学校」（英文）の最後に，Politics must never meddle with an educational institution（政治は教育機関に決して干渉すべきではない）と述べています。

新渡戸の弟子達が中心となって制定された旧教育基本法の下では，同法第10条の「教育は不当な支配に服することなく，国民全体に対し直接に責任を持って行われるべきものである。」で教育は時の政権の干渉から守られていました。現行教育基本法では，第16条に該当する条文がありますが，後段が，「国民全体に対し…」ではなく，「この法律及び他の法律の定めるところにより行われるべきものであり，…」となっており，時の政権によって作られる法律によって縛られることとなってしまいました。「不当な支配」の主体は旧法では「政権」でしたが，新法では「日教組などの団体」（伊吹文部大臣（当時））であるという解釈です。一見穏やかに見える法律も，時の流れでどのような政権がどのように利用（悪用）するか分からないのは歴史を振り返えれば自明です。将来に禍根を残す文言となってしまいました。学問の自由が侵されようとするとき，教員はどのように振舞えばよいのでしょうか。重要な問題ですが，この倫理綱領案にそれに関わる条項はありません。少なくとも，

「教員は学問の自由を護り，その時点で得られる最新の最も正確な情報を曲げることなく教育により伝達する義務を負う。」

という趣旨の条項を入れるべきでしょう。

さて，「案」の第1条は，「教員は『高邁なる大志 Lofty Ambition』を抱く全ての学生を大人として遇し，敬意を持って接する」というものです。本学の伝統精神，Boys, Be Ambitious と Be Gentlemen とを織り込んだ条文であると言えましょう。北大の個性を明確にする条文の挿入は歓迎できます。Lofty Ambition はクラーク博士の札幌農学校開校式辞の中にある言葉です。クラーク博士はこの中で，「古い因習と階級制度からの開放（＝自由の獲得）が学問しようとする学生の胸に「高邁なる志」を目ざめさせずにはおかない」と述べ，また学生に Young Gentlemen と呼びかけています。まさに学生を大人として遇したのです。また，Be Gentlemen はクラーク博士が札幌農学校教育の校是とした言葉で，大島正健著の「クラーク先生とその弟子達」にクラーク先生がこの言葉を発したいきさつが書かれています。ところで，「案」の第1条の条文では，本学の学生はみな大志を抱いていることが前提となっています。ここには少し無理があります。そのような意識の無い学生に大志を抱けるようにサポートするのも教員の役目ではないでしょうか。無理をせずに2つの条文に分けて考えたほうがよさそうです。

第1条　教員は，本学で学ぶすべての学生を責任能力のある大人として遇し，人格を尊重し，敬意をもって接する。

第2条　教員は，本学で学ぶ学生が「高邁なる大志 Lofty Ambition」を育み，これに向かって邁進出来るよう，指針を示し，自由な学風の醸成に努める。

としたらいかがでしょうか。第1条に「責任能力のある」大人としたのは，単なる Adult（大人）としてではなく，Gentleman（紳士・淑女）として遇するということを明確にするためです。「人格を尊重し，」

を入れたのは，ハラスメントをしないという意味もこめています。第２条に「指針を示し」としたのは，クラーク博士の札幌農学校開校式辞に，「私達の示す模範と，私達の教授とにより学生を指導する」と書かれている決意に見習ったものです。教員の使命感の宣言的な性格の本倫理綱領には，このくらいの決意表明は必要でしょう。「自由な学風の醸成」を入れたのは，前述のように，クラーク博士の開校式辞に「古い因習と階級制度からの開放（＝自由の獲得）が学問しようとする学生の胸に「高邁なる志」を目ざめさせずにはおかない」とある事実や，クラーク博士の思想的なバックボーンであるアメリカ独立宣言の起草者，トーマスジェファソンの言葉「自由こそが学問と道徳の生みの親であることを…」が背景にあり，また，本学が伝統的に自由な学風を貫いてきたことを鑑みて入れたものです。

「案」の第２条は，「教員は学習目標を明確に示し，常に授業改善に努めるとともに，学生の自主的な学習を支援することで教育責任を果たす。」となっていますが，これさえしておけば教育責任の全てを果たせるというものではないでしょう。「教員はその教育責任の一環として（あるいは，教育責任の遂行において），学習目標を明確に示し，常に授業改善に努めるとともに，学生の自主的な学習を支援する。」とすべきではないでしょうか。第３条も同様です。「教員は，公正な成績評価を行い，明確な評価基準を公表することで説明責任を果たす」とありますが，これだけやっていれば，説明責任が果たせるのでしょうか。「教員は，その説明責任遂行の一環として，公正な成績評価を行い，明確な評価基準を公表する」とするのが良いでしょう。この条文は第４条とドッキングして「教員は，その説明責任遂行の一環として，公正な成績評価を行い，明確な評価基準を公表することとする。学生の個人情報については細心の注意を払って取り扱うものとする。」としても良かろうと思います。以上を鑑み，私の案を以下に示します。

前文はそのまま。（センターニュース No.72 参照）

第１条　教員は，本学で学ぶすべての学生を責任能力のある大人として遇し，人格を尊重し，敬意をもって接する。

第２条　教員は，本学で学ぶ学生が「高邁なる大志 Lofty Ambition」を育み，これに向かって邁進出来るよう，指針を示し，自由な学風の醸成に努める。

第３条　教員は「学問の自由」を護り，教育に当たってはその時点で得られる最新の最も正確な情報を曲げることなく教授する義務を負う。

第４条　教員はその教育責任遂行の一環として，学習目標を明確に示し，常に授業改善に努めるとともに，学生の自主的な学習を支援する。

第５条　教員は，その説明責任遂行の一環として，公正な成績評価を行い，明確な評価基準を公表することとする。学生の個人情報については細心の注意を払って取り扱うものとする。

全学教育　GENERAL EDUCATION

「あまのじゃく」を育てる

ー全学教育・導入教育の課題ー

触媒化学研究センター　教授　大谷 文章

ものごころついたころから「あまのじゃく（天邪鬼）」と呼ばれてきました。ずっと短所であると思っていましたが，博士の学位をとる頃から，ひょっとすると「あまのじゃく」も使えるのではないかと考えるようになりました。人とちがうことが研究に必要な条件の１つであると学んだからです。人が言うことの逆を言う偏屈な性格が，いつも独創的なものを産みだすというわけではありませんが，すでにあるものを疑ってかかることがだいじ，ということを否定する研究者はいないでしょう。理系の図書を購入するときには消耗品あつかいにしてもよい，というのは，研究がすすめば教科書に書いてあることもまちがいになってしまうことを反映していると聞きました。講義をする立場になってからは，機会があるたびに，研究における疑うことの重要性を強調してきました。ただ，講義のあとに感想を書いてもらうと，『これからは何でも疑っていきます』という，およそ「あまのじゃく」でないものが多く見うけられます。こちらがもとめているのは，『ほんとうに疑う必要があるのかを考えてみます』です。感想のなかには，『人を疑うことはどうしてもできません』というのもあって，卒業研究をはじめとする研究には不向きではなかろうかと感じることもあります。

大学の役割の１つは学位を授与することにあります。法律でどう規定されているかは知りませんが，学位の取得は，研究の成果である論文の審査に合格することが条件ですから，ちゃんと研究したか，ということが判断基準となります。そしてその研究に求められるのが，独創性であらばこそ，素直な聴講者ではなく，「あまのじゃく」を育てること，これが大学の大きな使命と考えられるわけです。専門科目をとるようになってから「あまのじゃく」を育てればいいのではと思われる方は多いかも知れませんが，高等学校卒業までの12年間，教科書や教師の言うことを素直に聴くことを是として過ごしてきた学生を，たとえ一部でも「あまのじゃく」に改宗させるには，全学教育の段階で何らかのショック療法が必要でしょう。

単位の実質化というのは，法律で定められた単位の定義にしたがって講義時間と同じ予習と復習をすることと理解しています。はっきりしていることは，この議論のなかには学生をどう育てるのかという議論が感じられないことと，高校までの授業と基本的に変わらないやり方を前提にしていることです。入学した時点ですでに「あまのじゃく」の学生が何割かいるのなら，単位の実質化という戦略は有効で，縛りがつよくなると反発する「あまのじゃく」に磨きがかかるとおもわれますが，残念ながら，さいきんはほとんど見かけませんので，この戦略では学生の「あまのじゃく」化はまったく期待できません。

北海道大学に赴任して以来10年以上にわたって毎年複数の総合科目や一般教育演習にかかわってきました。ここ数年は，どの科目でもクイズ形式で授業を進めています。毎回，５～10問のクイズに答えながらトピックスへの理解を深めるとともに，考えることを体験させようというわけです。こういう授業でも復習はできますが，予習はありえません。クイズを予習されたら新鮮さがなくなるからです。2006年度からは，『クイズで学ぶ化学と科学』という一般教育演習をはじめました。学生は，「考えることの体

験」の復習として，次週までに気の利いたクイズ（質問）を考え，演習の総まとめとして，さいごの講義時間に「化学や科学を理解するのに役立つクイズ」を発表します。どちらも，受講者どうしで投票してランキング（実名ではなくニックネームで）を出しますので，それなりに気合いが入っているようです。質問やクイズに気の利いたひねりを入れ，上位に登場するのは「あまのじゃく」タイプです。

このような演習や総合科目のように予習（場合によっては復習も）がないものについては，1コマあたりの単位数をへらすことも考えられているようです。合理的な考えのように聞こえますが，学習を拘束時間だけで計ろうとするのは，全学教育で「学生をどう育てるのか」という本質からますます遠ざかりますし，こんな対応策を考えるくらいなら，法律が定めている単位の定義がおかしいんじゃないのかと議論した方がいい，とおもうのは「あまのじゃく」でしょうか。

このあたりでそろそろ「あまのじゃく」の育て方を考えてみませんか。「あまのじゃく」ということばに抵抗があるなら，「クラーク精神」でも「フロンティアスピリット」でもかまいません。どちらも，素直に言われたことだけをする，なんてことは勧めていないはずです（『Boys be ambitious.』に『はい，そうします』と言うのは，『何でも疑え』に『はい，何でも疑います』と言うのとおなじです）。大学は高等学校の延長じゃないんだよ，学問や研究は素直さだけではできないよ，じぶんで考えるのが大学だよ，という強いメッセージこそ全学教育にもとめられているのではないでしょうか。

＊＊＊　全学教育の科目責任者からひとこと　＊＊＊

科目責任者は，全学教育を円滑に運営するために，平成11年度から任命されています。科目責任者会議は，各部局間の調整等のために，（1）授業内容，（2）成績評価基準，（3）授業開講数，（4）授業担当者の選定，（5）授業科目ごとに配当される予算の運用，（6）その他全学教育に関し必要な事項の協議を行います。今年度新任の科目企画責任者の方々に抱負を書いていただきました。

学生に人気の科目

「健康と社会」企画責任者　教育学研究院　教授　大塚 吉則

「健康と社会」は医学部，遺伝子病制御研究所，薬学部，歯学部などの生命科学分野のみならず，健康科学・健康教育講座を有する教育学部の教員（医師）も参加して多数の講義を開講しています。学部専門コースの学生に対する講義ではないので，学生生活上，知っておくべき健康に関する知識，健康と社会との関わりなどについての主題が多く出されています。具体的には，病気に関する知識は勿論のこと，健康づくりには何が必要なのか，健康的な学生生活を送るにはどうすればよいのか，スポーツ・食事と健康の関連など，多方面からそれぞれの専門家が講義を行っています。

どの講義枠も毎年大勢の学生が聴講し，大講堂で行われる講義は座りきれない（実際は席はあるのですが）学生が，階段に腰をおろして聴いており，学生の関心の高さがうかがわれます。

聴講する学生に不自由な思いをさせないためにも，魅力的な科目を今以上に数多く開講していくことができるように，努力していきたいと思います。

数学で重要なことは

「数学」企画責任者　理学研究院　教授　神保 秀一

４月から全学教育の数学科目責任者となりました。数学は理工系の学問の基礎科目ですが，最近では一般の多くの分野でも理論や技術が高度化して数学の知識や考えが多く利用されていると聞きます。よって多様な専門分野のどこを目指す学生の皆さんにとっても数学を学ぶことは将来のため大切であると言えそうです。我々数学の担当者はそれに合った良い数学教育をするために一層努力したいと思います。

数学の勉強で重要なことの第１は（第２，第３も）“時間をかけてじっくり勉強すること”です。昔ある数学者が王様に向かって“数学に王道なし”と言いましたが，実際には登山道のようになっています。長い坂道や難所がありますから無理せずたくさん時間をかけて進むことが良いのです。そしてそれらを乗り越えて高みに至ったときの気持ちも登山とおなじで非常にうれしいと思います。

いずれの道にも先達の教えというのがありますが，数学の勉強でもいろいろ知恵が残されています。いくつかを標語にして書きます。

数学を学ぶための心得：

1. 数学は究極のローテク
2. 友達を大切に
3. 失敗を恐れるな
4. 得意技を持とう
5. わからないことの面白さ

各項目について簡単な説明を Home Page に掲載していますので，興味のある方は見て頂ければと思います。

http://www.math.sci.hokudai.ac.jp/~jimbo

（数学を学ぶための心得新入生篇）

それだけじゃないぞ，と考える状況を用意すること

「芸術と文学」企画責任者　文学研究科　准教授　鈴木 幸人

北大に赴任して以来，私は，学生諸君にこう言い続けております。

「あなた方は，今の社会を支えつつ，より良くしていく責任がある，と世の中から期待されているはずです。」（「だから税金で運営しているんだ。」ともしばしば付け加えます。）

また学生諸君が，このところよく言われるような，文化多様性や多様な価値を受け入れつつ，尚且つ，悪しき相対主義に陥ることなく，自分の立つ位置を確立していくためには，言い古されたことでしょうが，専門分野への深まりと同時に総合性への広がりが不可欠なのだろうと思います。

さてそこで，私たちの「芸術と文学」，いわゆる古今東西の芸術作品を対象とする授業群が，「全学教育」で提供される理由は，おそらく，この辺りにあるように思われるのです。

なぜなら，各時代，各地域の芸術作品は，何かにつけて，現在の常識的な見方に変更を迫ります。私たちの授業で連日繰り広げられている，そのテーマ，そのアプローチ，そのプロセス…，それだけじゃぁ

ないぞ，他の見方もあるよ，と考えざるを得ない状況が用意されるからです。私たちの責務こそ重いと言わねばなりません。

ですから，—というべきか，しかしというべきか—，学生諸君にはこうも言っています。「世の中はすべからく—私の発言も含めて—玉石混交。だから，玉と石とを見分ける能力を身につけましょう。そのトレーニングは，大学でこそ—もちろん全学教育でも—，できるんですよ」と。

新「英語演習」

「英語」企画責任者　メディア・コミュニケーション研究院　准教授　土田 映子

平成18年度にスタートした英語の新カリキュラムも２年目に入り，教員や学生の反応が徐々に伝わってくるようになりました。今回のカリキュラム改正の主な目的は，第一にはいわゆる「学生の学力の多様化」に対応するために習熟度別クラスを導入すること，第二には近年のコミュニケーション力を重視する英語教育の流れに沿って英語による発信力を育成すること，第三には学問のツールとして英語を使えるようになる力を育てること，の三つでしたが，その３つめの目的を特に意識して開設されたのが「英語演習」の授業です。これはカリキュラム改正に先立って行われた全学の教員に対するアンケートで，北大生に望まれる英語力を尋ねたところ，「英語で論文を読む・書く力」を求める声が特に強かったことを踏まえた改正でした。そのため「英語演習」の担当教員には，「専門への橋渡し」としての授業を行っていただくよう説明をしています。

新「英語演習」導入から１年を経て，何人かの教員から思いがけない反応が寄せられています。「今までになくモチベーションの高い学生が集まった」「英語でのディスカッションがはずんだ」「教員と学生の興味が合致し，授業の雰囲気が非常に良かった」などです。こうした経験から，「もっと英語演習の授業を担当したい」と伝えてきた教員が学内・学外（非常勤）ともにいたのは特筆すべきことでしょう。教員は自分の専門性を生かした授業が行え，学生は第一希望が通るとは限らないもののある程度授業を自分で選択することができ，結果として上記のような幸福な授業が実現したのです。すべてがそのような授業とはいえないものの，学生の学ぶ意欲を刺激する機会をより多く提供できるようになったことは喜ばしいことです。抽選の方法やクラス人数の問題など，課題は少なくありませんが，今後ともより効果的な演習展開のため英語教育系として努力してまいります。「英語演習」を出講してくださる他学部の先生方にも，改めてよろしくお願い申し上げます。

外国語教育 FOREIGN LANGUAGE TEACHING

スペイン語の世界と私たち

「スペイン語」企画責任者　メディア・コミュニケーション研究院　准教授　岡田 敦美

「スペイン語の世界」，それは一言で言うと，広くて多様性に富んだ世界です。スペイン語が話されているのはスペインだけではありません。ラテンアメリカの広い地域で，そして南西部を中心としたアメリカ合衆国や，北アフリカやフィリピンの一部でも母語として話されています。ロサンジェルス，ラスベガスなどのアメリカの地名や，アロヨ大統領，コラソン・アキノ大統領といったフィリピンの人名は，みなスペイン語起源ですが，この事実はスペイン語の世界が北米やアジアにまで及んでいることを物語っているのです。全世界でのスペイン語の話者は３億５千万人にも及ぶのですから，スペイン語は中国語やヒンドゥー語，英語に次ぐ大言語で，このことが多くのスペイン語学習者にとっての大きな魅力となってきたわけです。ラテンアメリカやカリブ海に隣接し，国内に数千万のスペイン語話者を抱えるアメリカでは，大学で最も学習者が多い言語は，今やスペイン語になりました。

それではスペイン語とはどんな言語か，というと，フランス語，イタリア語，ポルトガル語，ルーマニア語と兄弟言語のロマンス語に属します。高校までに勉強した英語がゲルマン語だったことを考えれば，ロマンス語を一つ勉強しておくと，かなりことばの世界を広げることができると思います。ロマンス語を一つ勉強しておくと，他のロマンス語に簡単に入っていくことができるのですから。スペイン語が持つ汎用性とは，スペイン語の話者が多いということに留まらず，隣接言語への応用性という側面もあるのです。とはいえ，これらの言語はラテン語が起源になっていますから，文法，特に動詞の活用などは腹をくくって取り組まなくてはなりません。スペイン語の場合はしかし，発音が日本語にそっくりで，簡単に発音したり，聞きわけたりできるので，少々お得感があります。

さて，そんなにお得なスペイン語がなぜ，ドイツ語や中国語のように昔から勉強されてこなかったのかというと，スペイン語は学問用言語ではないからでした。でも，スペイン語は国際協力や国際機関の仕事に関心がある人には強い武器になり得ます。スペイン語ができる人材の需要がかなりあるからです。それから豊かな自然のある南米にフィールドワークに向かう自然科学者も多数存在します。そして何よりも，現実にそこに存在するスペイン語圏の人々と，その世界が，様々な学問への扉として待ち受けています。

スペイン語の世界は，重層的に歴史と文化が重なりあっている世界です。スペインのカタルニア地方にはガウディの一連の作品がありますし，南スペインに行けばイスラム文化の歴史遺産があります。中南米に目を転じてみれば，そこにはアンデス文明やマヤ文明の遺跡から，ビル・ゲイツを抜いて通信事業によって世界一位の富豪になった企業家までもが同居する，世にも不思議な空間が横たわっています。語学の勉強というのは，外国語のスキルを身につけるだけではなくて，我々が生きているこの地球上で起こっていることや，未知の世界の存在に，目を向けさせてくれる絶好のチャンスなのです。

授業中は時間の制約があって，皆さんにご紹介できることは限られているのですが，実は私たち外国語を教えている教員は，「こんなに面白いこともあるよ」「あんなに驚嘆すべき文化があるよ」といった話がしたくてウズウズしている先生ばかりです！　ためらうことなく積極的に先生に話しかけ，本を紹介して頂いたりして一生の課題を見つけましょう。演習科目は少人数ですから先生と直接お話しやすく，おすすめです。もちろん通常のスペイン語の授業の先生も活用して下さい。教室で皆さんをお待ちしています。

センター CENTER

単位の実質化
―第 11 回北大教育ワークショップ―

1 泊 2 日の教員研修である「北海道大学教育ワークショップ」は，できるだけ多くの新任あるいは若手の教員が参加できるように，今年度から年 2 回開催されることになりました。今年度 1 回目は 6 月の大学祭の時期に行われ，2 回目の「第 11 回北海道大学教育ワークショップ」(Faculty Development, FD) は，11 月 9 日（金），10 日（土）の両日，いつもの会場である奈井江町農業改善センター（奈井江温泉ホテル北の湯）で行われました。(この会場にはバトミントンコートの大きさの多目的ホールがあり，グループ討論を行うのに最適の環境で，北海道医療大学，北大工学部などもこの会場を研修会に使っています。)

研修参加者は，本学の研究科及び研究所等から 28 名，北海道教育大学，旭川医科大学，室蘭工業大学，弘前大学，旭川工業高等専門学校，苫小牧高等専門学校から 1 名ずつの研修参加者合わせて 34 名に，世話係，講師，事務職員など合わせて総勢 40 名で実施されました。

今回は午前 8 時 15 分クラーク会館で受付，8 時 30 分に出発しました．奈井江町へのバスに乗ってから，例年のように，参加者の自己紹介で研修会が始まりました。前回より 15 分時間を繰り上げた結果，余裕を持ってバスが会場に到着ました。直ちに記念写真をとってから，午前 9 時 55 分より，表 1 のようなプログラムで，脇田稔副学長の挨拶から研修が始まりました（写真 1）。

今回のワークショップのテーマは，「単位の実質化」です。平成 18 年度から全学教育に導入された「履修登録単位の上限設定」によって，1 科目当たりに学生が割ける時間が増加し，「2 単位は 90 時間の学習に相当する」という基準を実現する環境が整ってきています。授業に予習復習などをシステマティックに組み込み，与えられる単位に相当する授業内容と学生の学習時間を実現すること，すなわち，「単位の実質化」は，全学教育における現時点での最重要課題です。(センターニュース 72 号の新田先生の記事を参照して下さい。)

ワークショップのメインプログラムでは，参加者を 5 グループに分け，「単位の実質化」を実現するための工夫を盛り込んだ新しい授業を設計するという課題で，グループ作業を行いました。

授業の設計は，3 回のセッションに分けられ，(I) 科目名と目標，(II) 方略（15 回分の授業内容），(III)「評

写真 1．脇田副学長の挨拶

写真 2．グループ討論

価基準」，の順に行われました。おのおののセッションは，（1）30 分程度のミニ講義，（2）小グループに分かれての 60 分の討論，（3）全員が集まっての討論の成果の発表会，という 3 つの部分からなり，このセッションを繰り返すという構成で行われ，例年のように有意義な会になりました（写真 2）。

より具体的には，参加者全員が専門分野が片寄らないように A，B，C，D，E の 5 グループに分かれ，それぞれのグループが，あらかじめ指定されている

A：一般教育演習
B：一般教育演習
C：一般教育演習
D：総合科目
E：大学院共通授業

という設定の科目を設計する課題にいどみました。

今回は，夕食後に獣医学研究科の藤田正一先生の講演をお願いしました（写真 3）。講演のタイトルは「クラーク博士とその教え子たちの言葉から」で，札幌農学校の歴史，クラーク先生，佐藤昌介などの第 1 期生と新渡戸稲造，内村鑑三などの 2 期生，さらには彼らの影響を受けた人々の言葉を通じて北海道大学はどういう大学であるのかということが語られました。

今回もワークショップの総合評価に関するアンケートをとりました。センターニュース 33 号に 1999 年度の第 2 回の結果が掲載されていますので，いくつかの項目について，今年度の第 10 回（6 月）と第 11 回（11 月）の 2 回のものと比較してみました。

第 2 回の研修参加者は各部局の教育に責任を持つ教務委員の方が大半でしたが，今年の 2 回の参加者は北大に赴任して 5 年以内の助教以上の教員なので，年齢と教育経験がかなり違います。

「このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか？」という質問への回答における「きわめて」と「かなり」の合計は，第 2 回 46%，第 11 回 39%，第 10 回 34% の順で，これはプログラムのハードさ（内容量と時間）の順と同じになっています。内容が多いと期待していたものが含まれている可能

表 1．第 11 回　北海道大学教育ワークショップ　プログラム

2007 年 11 月 9 日 (金)

8:15 クラーク会館 1 階ロビー集合・受付
8:30 バス 出発　研修開始 : オリエンテーション挨拶
9:45 ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着 ,
　　玄関前で記念写真
9:55 挨拶「FD 実施にあたって」(20 分)
　　(脇田稔副学長)
10:20 ミニレクチャー「FD の目的と意義」
10:50 休憩（15 分)
11:05 ミニレクチャー「単位の実質化について」

12:00 昼食（ 60 分 ）

13:00 研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング（30 分)
13:30 ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」(30 分)
14:00 グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分)
14:10 グループ作業 I「授業の設計 1: 科目名・目標の設定 」(60 分)
15:10 発表・全体討論（50 分)
16:00 休憩（20 分)
16:20 ミニレクチャー「教育方略」(20 分)「学習ポートフォリオ」(10 分)
16:50 グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分)
17:00 グループ作業 II「授業の設計 2:(目標の手直しと) 方略」(60 分)
18:00 発表・全体討論（50 分)
18:50 夕食（40 分)
19:40 講演「クラーク博士とその教え子たちの言葉から」(30 分)　(藤田正一獣医学研究科教授)
20:20 懇親会

2007 年 11 月 10 日 (土)

7:30 朝食
8:30 ミニレクチャー「評価」(30 分)
9:00 グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動 (10 分)
9:10 グループ作業 III「授業の設計 3:(方略の手直しと) 評価」(60 分)
10:10 発表・全体討論（50 分)　–休憩（10 分) –
11:10 参加者の個人的感想や意見（50 分)

12:00 昼食（60 分)

13:00 バス出発
14:30 JR 札幌駅北口経由で北大キャンパス到着

性が高まるというように解釈できます。

「このワークショップで示された教育学的方法を今後取り入れようと思いますか？」という質問への回答における「大いに」と「かなり」の合計は，第2回の35% に比較すると，第11回54%，第10回63%の順で増加していますが，これは第10回と第11回の研修参加者が若くて教育経験が少ないということによると思います。

「今後ともこういうワークショップを持つべきか？」という質問への回答における「ぜひ」と「持つ方がよい」の合計は，第2回は60% でしたが，今年度は第10回の71%と第11回の42%とでは大きな差が出ています。その差は第11回は55%の参加者が「持ってもよい」と回答していることからきています。今年度の2回の回答の差の理由は，大いに気がかりですが，来年度もワークショップを2回行いますので，そのアンケート結果などから次第に明らかになるものと考えています。

写真3.　藤田先生の講演

高等教育 HIGHER EDUCATION

「日米のTA研修を比較する」

ー高等教育フォーラム 開催されるー

11月28日(水)15時から上記テーマのフォーラムが，UCバークレーのヘーネ博士をお招きして，情報教育館4階共用多目的教室(2)で開かれました。演題名と講師は，下記の通りです。

「職業としてのティーチングとTA研修
～北大高等教育センターの役割」
北海道教育大学教育学部函館校 教授 宇田川 拓雄

「UCバークレーにおけるGSIの役割とGSI研修」
カリフォルニア大学バークレー校GSIセンター長
リンダ・フォン・ヘーネ博士

GSIとはGraduate Student Instructor(大学院生講師)で，日本のTAに相当する職名です。北米の，多数の優秀な大学院生を擁する研究大学では，院生を大学教育に積極的に参加させ，専門的分野における優れたコミュニケーション能力を持った人材養成に役立てています。バークレーはその代表格の大学です。北米の多くの研究大学では，博士課程修了者の

就職支援の一環として積極的にティーチング教育に乗り出しています。

これまで日本の大学では大学教員の主要な仕事の一つであるティーチングの価値，方法，効果，効率はほとんど研究者の関心の外にありました。北大の高等教育センターでは全学教育改革の試みの中で，TA 研修が，研究とティーチングの双方に優れた人材を養成するシステムの一部になりうることに気づき，北米の先進大学に学び，成果を上げてきました。日本の大学で来年度から義務化される FD 研修も，このような方向を示すものと考えられます。

宇田川先生は，このような北海道大学の活動を概括し，日本の多くの大学では TA 研修があまり実施されていないことを説明されました。また，職業教育としての TA 研修の重要性を強調されました。

一方，ヘーネ先生はまず，米国の TA 研修の歴史から解説されました。米国の大学院教育は当初から TA とともにあり，その発展にともなって TA 研修が整備されてきたこと。その目的ははっきりしていて，経費の節減にあることなどです。

次に，広範にわたる GSI センターの活動全般について説明されました。その例を挙げれば，「ティーチング・カンファレンス開催」，「教育改善のための研究費支給」，「GSI のための講義」，「GSI となる留学生のための英語講座」，「優秀な GSI の表彰」，「高等教育研究セミナー」，「将来大学の教員になる人のための講義」，「GSI と教員のためのセミナー」，「講義（教育）のためのガイドライン」等々です。これらの仕事をおよそ 6 名のセンター職員で運営しています。

将来大学の教員になる院生のための，しっかりした道筋と教育のしくみがあることがわかった講演でした。

写真 4．ヘーネ博士による講演

生涯学習　LIFELONG LEARNING

遠友学舎炉辺談話が始まる

北大創基 125 周年を記念して建った「遠友学舎」を会場に，北大教員と市民･学生との対話を意図した，誰でも参加できる発見と学びの場として発足した「遠友学舎炉辺談話」が始まりました。今年も 11 月～ 1 月まで 3 回，下記のように副学長，研究科長を講師に実施します。第 1 回には 30 名の参加者がありました。皆様のご参加をお待ちしています。

写真 5．脇田　副学長の講演

会場：北海道大学遠友学舎（北 18 条西 6 丁目）
時間：午後 6:30 ～ 8:30
受講料：無料 (事前の申し込み不要)
第 1 回 11 月 29 日 (木)
　脇田 稔 副学長
　「歯医者の神様」
第 2 回 12 月 20 日 (木)
　青木 紀 教育学研究院長
　「現代日本の貧困を考える」
第 3 回 1 月 31 日 (木)
　山口佳三 理学研究院長
　「幾何学の歴史–人は空間をどのように認識してきたか–」

入学者選抜　ADMISSION SYSTEMS

東京進学相談会に 500 名を超える参加者

11 月 3 日（土）に東京ビッグサイトにおいて北海道大学進学相談会が開催されました。主に関東圏の高校生や保護者，高校教員等 518 名に参加いただきました。脇田副学長による開会挨拶，続くアドミッションセンターの小内副センター長による本学の紹介の後，全 12 学部の教員による進学相談，北大生による受験相談，事務職員等による入試や学生サービスに関する相談等が行われました。アンケートの結果，参加者の 7 割超が満足しており，対応した本学教職員の評価も上々でした。しかし相談待ち人数が多すぎる，模擬講義がないなどの指摘もありました。今後改善を図りながら進めていく予定です。

写真 6．説明会の様子

AO 入試速報

11 月 18 日（日）に，平成 20 年度ＡＯ入試の２次試験が本学で行われました。募集人員 97 名に対して 268 名の志願者があり，平均倍率 2.8 倍でした。詳しくは下記表をご覧ください。今年は沖縄からの志願者もあり，前年度より志願者はやや微増となりました。なお，合格発表は，センター試験の成績を合否の判定材料にする工学部応用理工系 (応用化学コース・応用マテリアルコース) 及び農学部農業経学科を除き，12 月 5 日に行なわれました。

表 2. 平成 20 年度 AO 入試合格者数

センター日誌　CENTER EVENTS，*September- October*

9月

1日　・（説明会）進学セッション 2007（札幌）
4日　・（訪問）京都府南陽高校
5日　・（会議）外国語科目責任者会議
6日　・（会議）総合科目責任者会議
9日　・（行事）北大セミナー in 函館
10日　・（会議）平成１９年度第２回教務委員会
11日　・（会議）文系基礎科目責任者会議
13日　・（会議）AO 入試部会
14日　・（訪問）東京都帝京高校
16日　・（説明会）主要大学説明会（東京）
19日　・（説明会）岩見沢東高校（岩見沢）
21日　・（説明会）中標津高校（中標津）
25日　・センターニュース　第 72 号発行
26日　・（訪問）岐阜県中京高校
27日　・（訪問）函館高校
28日　・（会議）第５回教育改革室会議
　・（訪問）三重県津東高校，旭川大学高校
29日　・（説明会）函館中部高校（函館），高知県土佐塾高校（土佐）
30日　・（説明会）主要大学説明会（札幌）

10 月

3日　・（訪問）長野県飯田風越高校
4日　・（訪問）室蘭栄高校
5日　・（訪問）大阪府天王寺高校，北海学園札幌高校
9日　・（訪問）三重県皇學館高校
10日　・（訪問）愛媛県新田高校
　・（説明会）広島県尾道北高校大学説明会（プロフェッサービジット企画）
11日～ 18日
　・（行事）AO 入試願書受付
12日　・（会議）合同科目責任者会議
　・（訪問）滋賀県日野高校，札幌啓成高校
　・（CVP）留学生向けキャンパスツアー
13日　・（行事）北大セミナー in 北見
16日　・（訪問）小山工業高等専門学校
17日　・（訪問）大阪成蹊女子高校
18日　・（訓練）高等教育機能開発総合センター，附属図書館北分館，メディアコミュニケーション研究院，情報教育館・放送大学北海道学習センター合同消防訓練
20日　・（訪問）愛媛県今治東中等教育学校
23日　・（会議）全学教育委員会小委員会
26日　・（会議）平成 19 年度第３回共通授業検討専門委員会
27日　・（CVP）第２回市民ツアー
29日　・（会議）北海道大学における高大連携在り方検討 WG
30日　・（会議）第２回クラス担任会議

行事予定　SCHEDULE，*December - March*

【日（曜日）】	【行事】	【備考】
12月 25(火)～1月4(金)	冬季休業日	
1月 7(月)	授業再開	
19(土)～20(日)	大学入試センター試験【18(金)休講】	
22(火)～23(水)及び 29(火)～30(水)	補講日	
24(木)	金曜日の授業を行う日	
28(月)	第２学期授業終了	
31(木)～2月 13(水)	定期試験	
2月 14(木)～18(月)	追試験	
15(金)	成績報告締切（非常勤〔帳票〕）	
19(火)正午	成績報告締切（常勤〔Web 入力〕）	
25(月)	北海道大学第２次入学試験(前期日程)	
3月 12(水)	北海道大学第２次入学試験(後期日程)	
中旬～下旬	学科等分属手続	当該学部

センターニュース　2007，No. 73　目次

＜巻頭言＞北海道大学教育倫理綱領～改訂案
ー「学問の自由」と「北大の教育精神」を明瞭にー
藤田 正一 …… 1

「あまのじゃく」を育てる
大谷 文章 …… 4

学生に人気の科目
大塚 吉則 …… 5

数学で重要なことは
神保 秀一 …… 6

それだけじゃないぞ，と考える状況を用意すること
鈴木 幸人 …… 6

新「英語演習」
土田 映子 …… 7

スペイン語の世界と私たち
岡田 敦美 …… 8

単位の実質化
―第 11 回北大教育ワークショップ― …… 9

日米の TA 研修を比較する
―高等教育フォーラム 開催― …… 11

遠友学舎炉辺談話が始まる …… 12

東京進学説明会に 500 名を超える参加者 …… 13

AO 入試速報 …… 14

センター日誌・行事予定 …… 15

目次・編集後記 …… 16

編集後記

大学院生は研究者になるだけではなく，将来どのような職場においても，後輩を教育する教育者としての活動が期待されています。研究しかできない博士は，いかなる職場でも生きていけない時代になりつつあります。ところが，これまでの日本の大学院教育の中では，このことが明示されないばかりか，ほとんど無視されてきました。

早くから教育者としての大学院生を教育してきた米国の TA 研修制度が，高等教育フォーラムで紹介されました（13 ページ）。日本と米国との大きな違いに愕然としてしまいますが，まだ間に合います。

（歳）

センターニュース　第 73 号
（北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌）
発 行 日：2007 年 11 月 25 日
発 行 元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011)716-2111 ・FAX (011)706-7854
編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・木村 純・町井輝久
安藤 厚・川初清典・亀野 淳・山岸みどり
鈴木 誠・池田文人
ご意見，お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話： (011)706-7514; FAX (011)706-7521
インターネット ホームページ：
http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center